

# 東西文明の比較 (15)

陽光新聞社・顧問  
塩澤宏宣

日本の卑弥呼の時代には、中国はどうであったのか。多くの偉人が不朽の名著を残していることに驚かされます。ざっと挙げるだけで「詩経・書経・春秋左氏伝・論語・易経・孟子・荀子・孫子・韓非子」があります。いずれも2000年以上前に成立した書物で、未だに燦然と輝いています。

また、司馬遷は歴代の歴史を「史記」として残し、以後の歴史も、それぞれの王朝の足跡が残されることになりました。残念なことです。弥生時代には文字がありませんでした。貴重な日本の歴史は、「三国志」などの古代中国の史書に頼るほかありません。

弥生時代は、西晋王朝の陳寿がまとめた「三国志」の「魏書東夷伝倭人の条」、通称「魏志倭人伝」に記されています。文字数にして約2000文字です。その内容は三部に分かれます。

つぎに、その書から邪馬台国や卑弥呼について触れてみたいと思います。

## 1. 位置などに関して

「倭人は帯方（前漢の武帝が紀元前108年、朝鮮半島に置いた楽浪郡の南の郡）の東南大海の中に在り……その道里を計るに、当に東治の東に在るべし」

## 2. 倭人の風俗に関して

「其の風俗淫ならず……倭の地を参問するに、海中洲島の上に絶在し、或は絶え或は連なり、周旋五千余里可りなり」

## 3. 外交に関して

「景初三年六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わし郡に詣り、天子に詣りて朝献せんことを求む……因つて台（邪馬台）に詣り、男女生口三十人を献上

し、白珠五千孔、青大勾珠二枚、異文雜錦二十匹を貢す」

上記の区分けに添って述べてみます。

## 1) 「倭を邪馬台国として」の位置について

陳寿は「其の道里を計るに、当に会稽の東治の東に在るべし」と明記しています。会稽の東治とは、福建省の閩侯県の東を想定していたのです。おそらく、海南島の東方海上あたりではないでしょうか。15世紀初頭の地図（混一疆理歴代国都之図）には、日本の位置が海南島の東、朝鮮半島の真南に描かれています。邪馬台国はどこにあったか、という論争は北九州説と畿内説を中心に、全国80か所もあるようですが、確実な証拠が発見されていない状況では、いずれも「仮説」の域を出ないのではないのでしょうか。

## 2) 「邪馬台国」の風俗について

「其の国、本亦男子を以て王となし、住まること七、八十年、倭国乱れ、相攻伐すること暦年」に続いて「乃ち共に一女子を立てて王となす。名付けて卑弥呼と曰ふ。鬼道を事とし、能く衆を惑わす」と書かれています。「鬼道」は「道教」を言うようですが、不老長生の神仙信仰にもとづく現世利益の道教的信仰（鬼神信仰）が日本列島に導入されていたことは事実のようです。その証拠があります。2世紀末～3世紀前半に作られた方格規矩鏡（男仙最高の東王父、女仙最高の西王母を鑄す）が福岡県糸島市の井原やりみぞ鑿溝墓・平原墓で集中的に出土、畿内では3世紀中葉の奈良県桜井市ホケノ山古墳で見つかった画文帯神獸鏡にも東王父や西王母が鑄造されています。また、邪馬台国は階級社会であったことも読みとれます。

「下戸、大人と道に相逢へば逡巡して草に入り、辞を伝え事を聞くには、或いは蹲り或いは跪き、両手は地に拠り、之が恭敬となす」とあります。またト占に関する記述もあります。「其の俗挙事行来に、云為する所有れば、すなわち骨を灼きてトし、以て吉凶を占なひ、先づトする所を告ぐ。其の辞は令亀の法の如く、火坼（裂け目）を視て兆を

占う」がそれです。

なかでも注目する記述があります。「其の行来・渡海、中国に詣るには、恒に一人をして頭を梳らず、蝨を去らず、衣服垢に汚れ、肉を食はず、婦人を近づけず、喪人(喪に服している人)の如くせしむ。之を名付けて持衰(喪服を着た呪術者)と為す。若し行く者吉善なれば、共に其の生口・財物を顧し(与え)、若し疾病有り、暴害に遭へば、便ち之を殺さんと欲す。其の持衰謹まずと謂へばなり」。また葬送の記事もあります。「停喪十日余日、時に当りて肉を食はず、喪主哭泣し、他人に就いて歌舞飲食す、已に葬れば、挙家水中に詣りて洗浴す」。現代にも通じるようなところがあるように感じますが……。

### 3)「外交」について

邪馬台国と魏王朝との外交が文書で行われていました。景初3年(239)十二月、魏の順帝が「親魏倭王卑弥呼」に詔書を与え、正始元年(240)少帝が勅使を遣わして詔書をもたらしめました。おそらく渡来の知識人がいて詔書の内容を卑弥呼に説明していたのではないのでしょうか。邪馬台国と魏の交渉回数、邪馬台国から三回あります。魏側からは、勅使(梯儵・張政など)の派遣や帯方郡太守との交わりが頻繁にあったようです。

邪馬台国の王位は、男王一女王(卑弥呼)一男王一女王(台与)一男王へと受け継がれました。2世紀半ばから3世紀は、激動の時代であったことが分ります。「倭国の乱」の背景について少し述べてみます。中国の後漢末、太平道の信徒による黄巾の乱(184～188)が起り、王朝は衰退し、朝鮮半島における民族の勢いが盛んになり、楽浪郡や帯方郡などの後漢による植民地支配が出来なくなりました。「倭国の乱」もこうした隣国の影響を受けたことは当然といえるでしょう。

この項の最後に「邪馬台国と女王卑弥呼」の論争について述べてみたいと思います。

通称「魏志倭人伝」は、養老4年(720)に奏上した日本書紀が神功皇后摂政の条に引用しているように、卑弥呼は神功皇后と対応する人物と考えてい

た可能性があります。

初唐の魏徴が隋王朝の歴史を著わした隋書の東夷伝倭国の条は、「邪靡推(やまと)に都す。則ち魏志の所謂邪馬台なり」と明記して、開皇20年(600)からの奈良県のヤマトにあった飛鳥朝廷との外交を述べる中で「魏志」の邪馬台国に言及しています。

邪馬台国の研究は、江戸時代から本格化します。まず、江戸初期の儒学者で医者、松下見林。その著作「異称日本伝」で「卑弥呼は神功皇后の御名、氣長足姫尊(おきながたらしひめのみこと)を、故れ訛りて然か言う」と書いています。

新井白石は正徳6年(1716)、「古史通或問」で、「倭女王卑弥呼と見へしは日女子と申せし事を彼国の音をもてしるせしなるべし」として、「魏志に倭女王奉献の事見へしは神功皇后の御事とみへけり」と、邪馬台国畿内説と女王卑弥呼＝神功皇后説を公にしました。

日本国学の泰斗、本居宣長は、中国史書の記述には多くの疑惑を抱いていたようです。安永6年(1777)に執筆した「馭戎慨言(からおさめのうれためごと)」では、「かの国(魏)へ使をつかはしたるよししるせるは、皆まことの皇朝の御使にはあらず。筑紫の南のかたにていきほひある、熊襲などのたぐひなりしものの、女王の御名のもろもろのからくにてまで高くかがやきませるをもて、その御使といつはりて、私につかはしたりし使也」と論じています。

「天照大御神の神代」以来の「皇朝」論者の宣長は、「そもそも大御国には、神代より今に至るまで、天皇の御末(子孫)ならで、王といふ例は、さらなきことなるを、三十許国、国ごとに皆王と称すといへるは、まことには王にあらで、次に大倭といへるぞ、まさしく天皇をさして申せるには有りける」ということになります。

本格的な科学的論争は、明治時代になります。明治43年(1910)、東京帝国大学の白鳥庫吉と京都帝国大学の内藤虎次郎の論争です。いずれ機会があれば、述べてみたいと思います。